

訃 報

元名古屋大学大型計算機センター長成岡昌夫名誉教授は、去る平成15年6月17日に逝去されました。享年85歳。

同名誉教授は、昭和15年3月京都帝国大学工学部土木工学科を卒業、同年京都帝国大学工学部講師を嘱託された後、同助教授、京都大学工学部教授を経て、同36年4月名古屋大学工学部に土木工学科が創設されると同時に同大学教授を併任、同36年10月名古屋大学工学部教授に配置換となり、以降、構造力学・土木計画学・情報検索学を担当し、本学に19年余の期間在職して、同56年4月停年により退職されました。

その間、大型計算機センターの誕生に手腕を発揮し、昭和46年4月その設置と同時にセンター長に就任、引き続き退職までその職責を全うし、同センターの発展及び大学全体の行政に尽力し、多大な貢献をなされました。

ここに同名誉教授のご功績を偲び、慎んで哀悼の意を表します。



成岡昌夫先生の訃報に接して

福 村 晃 夫

成岡昌夫先生がお亡くなりになったことを聞いたのは、名古屋市の街中であった。横断歩道の向こう側から来た、元大型計算機センター職員のH君が私の姿を見つけて教えてくれたのである。なにぶん道路端に寄っての立ち話であったから、思い入れのある話に繋がるいとまもなく、気持ちの始末ができないままになっていた。そこへ、基盤センター長から追悼文の要請が舞い込んだのである。当方が名大を去ってから15年、それに7年を加えると成岡先生がご停年で大型計算機センター長を退任された年になる。随分昔のことだから、情報化の進んだいまの世代で追悼文をしたためるには、いささか歴史を語らなくてはなるまい。

いまの名大情報連携基盤センターは、もとは全国共同利用名古屋大学大型計算機センターであり、同種のものが全国に七つあって、互いに連携し合いながら学術計算サービスを続けて来たことをご存知の方は多いであろう。この組織は、もともと学術会議の勧告に沿って旧文部省が予算措置をしたもので、昭和30年代末に最初のセンターが、東大で試験的に稼働を始めた。いまは周

知のことであろうが、学術計算の需要は供給の体制が整えば際限なく顕在化する。この事実を押されて、学術会議は関東地区以外にもセンターを増設することを勧告し、昭和46年の名大センターの発足で、このプロジェクトはひとまず終止符をうち、七つの大型計算機システムを擁するユニークなサービス組織が出現することになった。

このユニークさには、他国に類例を見ないということもあるが、それより、明治以来の象牙の塔が立ち並ぶ大学群のなかで、サービス、ユーザ、需給バランスのような言葉が実務のなかで真剣に語られることのほうがはるかに特異的であった。あえて言うならば、社会性に乏しい研究者の集団のなかに、研究を本務とするべき人達による、すぐれて社会的であるべき組織が根づかざるを得なかったのである。計算需要の充足は大事だが、背景に市場経済のメカニズムがあるわけではない。研究所ならぬセンターにおける、学生を持たぬ教官の存在、サービス機関であるがゆえの、出張利用者に対する旅費の支給、その逆の、市価に比べれば超廉価の利用負担金の徴収、それに、レンタル料の超高率のアカデミックディスカウントなど。前例のない特異なことが多かった。

成岡先生も特異な方であった。徹底した業績（論文）主義と専門性（アイデンティティー）の尊重、顔を赤らめての熱気の籠もった語り口。ご自分がコンピュータの大口ユーザであったせいもあるが、情報やコンピュータの研究教育には強い支援を惜しまれなかった。そのときの決まり文句は「非協力の協力」であった。手出しや口出しをせぬことが協力になるような支援という意である。停年までの数年間は、名大センター固有の文献データベースを作るべく、自らデータの入力をつづけておられた。これが停年間際の教授のやるべきことだというのがお説であった。センターの運用面での細かな目配り、気配りも表には出されなかったようである。定員確保と予算獲得が俺の仕事だと言わんばかりに、もっぱら外回りに努められた。したがって、センター長室にあまり来られなかったように思う。頼りになって、邪魔にならない名センター長であった。

成岡先生は、名大キャンパスがなかなか情報化しないことを早くから気にしておられた。名大は昭和35、36年の両年に渡って、すなわちFORTRAN以前の時代に機械語レベルの汎用コンピュータを初めて導入した。このとき全学計算機委員会が構成されて、学内共同利用の総合計算機室ができた。成岡先生は昭和43年にその室長になられたのだが、そのとき計算機室のマシンは導入時のままであったのである。東大センターはすでに稼働中であり、東北、京都、九州の各大学は大型機導入の決定を済ませた段階であった。当時のわが国には、大学、高専の研究者からなる大型計算機利用者の全国組織が有り、成岡先生は東海地区利用者協議会の会長であった。それに先生は工学部選出の評議員でもあったから、工学部長ともども、この情けないほどの時代後れの挽回に強力に動かれたはずである。

公式には、昭和42年に学部長等を委員とする「大型計算機設置に関する委員会」が構成され、工学部は、学部長提案で「大型計算機勉強会」を発足させ、42、43年にわたってセンター創設の基礎的な準備作業をはじめた。成岡先生は、その世話人であった。名大の執行部は、昭和45年度への概算要求を山場と踏んだようである。じっさい、既成事実を先に作ってしまう形で44年7月に「大型計算機センター設置準備委員会」を発足させ、成岡先生が委員長になられた。これは他

大学からの委員も含み、広報、機種調査、運営方式の3小委員会を持つ、本格的作業を行うもので、国内メーカーにシステム提案の要請を行い、その回答の評価も行った。

昭和45年に入って新年度予算が確定した4月に、こんどは本番の「大型計算機センター設置準備委員会」が発足し、その下に学内教官、職員16名からなる建設本部が組織された。成岡先生は親委員会では工学部代表委員に、建設本部では本部長に就任された。いよいよ待ちに待ったセンター作りである。46年10月の発足へ向けて全作業のタイムテーブルが作られ、本部長のもとで教官も職員も一緒になって働いた。

それから30有余年、センターシステムはその外貌も内容もすっかり様変わりした。計算センターを、そのユーザを含めて需給を追う一つの社会組織としてとらえてみれば、その全体が技術の進展に強く影響されることは当然である。我が国の国立大学における計算センターの存在は、アカデミズムとビューロクラシーの枠組みのなかで確かにいびつであった。いまでもそうだろうか。いびつではあるが、なくてはならないもの。これを存在させるには優れた知恵と絶大な努力がいる。その意味で、我が国大型計算機センター群を立ち上げられた先駆者の一人としての、また名古屋大学大型計算機センター初代センター長としての成岡先生のご功績を心から讃え、ご努力に対して深甚なる謝意を表したい。

多様なデータと多岐に渡るアルゴリズムを、不特定多数の人達に、いつでもどこでも自由に使ってもらおう。これが情報サービス者の理想であろう。ITの夢と言ってもよいかもしれない。昔は、この夢は超大型コンピュータのなかに描かれていたが、いまはネットワーク上に展開されている。もし成岡先生とこんな話をするのだったら、もう少し後のことになりそうだ。

合掌。

(ふくむら てるお：名古屋大学大型計算機センター第2代センター長 名古屋大学名誉教授)